

没後二〇年 詩人・木ノ内洋二と一九八〇年前後の小樽

それは 鏡の戸の障子の空ろ

それは 望むな階下の顔の戸

カイオレット 私の仮面よ

私の鏡の内なる鏡 私の仮面よ

そなたを前にして 私の素面は死を息吹く

私のうつしみという一つの死を

指す日の皮膜

光の凝姿のさなか

影の憑代のはざま

そのまがときの瞬きの間の太陽に

私は私の仮面を憑す 私は視るもはや

私はカイオレットに肖て ガイオレットではない 私の仮姿を

刺 この変容の午 既に

回生の鏡は私の眼裏にない

あかねす紫の女人カイオレットよ

そなたは何故を見失せたのか

冷女見

2025年4月5日(土)～6月22日(日)

休館日：毎週月曜日(5月5日を除く)

(祝日は開館し4月30日・5月7～9・13日は振替休館)

開館時間：9時30分～17時(最終入館16時30分)

観覧料：一般300(240)円

高校生・市内70歳以上150(120)円

障がい者・中学生以下無料

()内は20名以上の団体料金

後援：小樽文学舎

『小樽詩話』1971年3月号・木ノ内洋二「カイオレットの仮面に向って」より

詩人であり、小樽文学館設立期成会のメンバーでもあった木ノ内洋二（一九四〇—二〇〇五）は、小樽市花園町に生まれました。花園小学校、菁園中学校、緑陵高校商業科を卒業し、一九五八年に明治大学文学部に進学。六二年に退学し、小樽に戻る。陣内露山写真館に勤務しました。文学館設立期成会を経て文学館研究員として一九七八年から二〇〇二年まで勤務しましたが病を得て退職。二〇〇五年に死去しました。

稲垣足穂や 澁澤龍彦に師事し、

詩画集などをのこした詩人としての側面、一原有徳や萩原貢らと交友し、話好きで酒の席に現れては語り明かした側面、膨大な知識と広い交友関係から北方舞踏派やジャズ愛好家たちの相談役となつた側面、そして文学館設立準備時期から調査研究・展示の基礎作りをした側面など、小樽の地に根を張り、小樽の文化を支えた一人の詩人の足跡を没後二〇年の節目にたどります。

あわせて、若者を中心とした前衛的な舞踏や美術が活発に行われた一九八〇年前後の小樽のカルチャーシーンについて、助言者、評論者として積極的に関わつた木ノ内氏の言葉を通して考察します。



木ノ内洋二 1980年頃

『詩人・木ノ内洋二』(二〇〇九)に寄せられた追悼文より

笑い顔しか思いだせない。

木ノ内さんの事を思うと、うかぶのは笑い顔だけだ。怒った顔も悲しんだ顔も全然思いうかばない。

「ねえねえ これ おもしろいんだ」

「これ おもしろいでしょ」

「ダフフフ……」

木ノ内さんと会っているときはいつも、「おもしろかった」し、「楽しかった」からだと思う。一九七六年ころ、いつの間にか木ノ内さんは私のそばにいた。

(渡邊真一郎)

もう一つ、洋二さんを通して、澁澤龍彦からの伝言である。ちょうど「ヴィオレット」の出版で上京されたとき、多作の必要性を解かれ、毎年一冊くらい出すようにと洋二さんにいわれ、あわせて一原にも伝えてほしいとのことであった。後年実作上に自信を持たせてくれた力強い忠言であった。

(一原有徳)

木ノ内さんは実によく笑う人だった。笑うことならいつでも付き合います、という邪気のない人だった。いつも屈託なげであった。いや、なかった筈はあるまい。それを見せなかつただけ、ではなかつたか。

(萩原貢)

稲垣(足穂)先生宛 私の手紙

『少年愛の形而上学』を繰返し読んで、先生がお書きになつていらつしやる言葉を、空で覚えている木ノ内さんとお話するのはなかなか楽しい。テンポが早く元気な木ノ内さんには感心させられます。

黒いセーター、黒いパンツで「サヨナラ!」と言うと、アツという間に、夕方の人混みに紛れてしまう木ノ内さんは、ちよつとせわしないカリガリ博士の小道具係と言つた風です」

(萩原幸子)

「ブツダのことは」には 美しい比喻もありました。

「水の中の魚が網を破るように、また火がすでに焼いたところに戻つて来ないように、諸々の煩惱の結び目を破り去つて、犀の角のようにただ独り歩め」

(吉田美和子)

展示構成

■詩人とブルース

七八年ファンの集まり「ブルースこれっきり」の経緯

■詩人と津軽

古川壬生LP「壬生」自主制作の経緯(壬生 LPライナーノート他)

■詩人と六〇年代アヴァンギャルドアート

六〇年代澁澤龍彦からの来信と送られた美術舞踏ポスター・パンフレット等

■詩人と小樽文学館

新聞連載「私と小樽文学館」より

■詩人の言葉

長編詩「ヴィオレット」より・一原有徳との合作詩「オイティン・ブース」より・文学論美術論他

■詩人と一九八〇年前後小樽のアートシーン

運河保存運動と音楽・舞踏・美術・映画年表(小樽で発行されたタウン誌・コンサート・映画チケット等)

同時開催 小樽文学館と模型クリエイター 展示をつくる仕事の舞台裏
ミュージアムに必須の展示模型。小樽文学館では技術を持った職員や協力者が制作を行ってきました。開館47年目に、これまでに制作・活用された模型のコレクションを制作過程とともに展示します。

5月17日(土) 14時〜14時40分 学芸員・制作者による展示解説

6月8日(土) 14時〜15時30分 1階研修室 講演「わたしの模型の作りかた」田中まり



起伏ある小樽の地形模型制作

